

研究区分	教員特別研究推進 教育推進
------	---------------

研究テーマ	European Studies の研究ツール開発に関する研究 (4)				
研究組織	代表者	所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	栗田 和典
	研究分担者	所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	前山 亮吉
		所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	剣持 久木
		所属・職名	経営情報学部・教授	氏名	上野 雄史
		所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	小窪 千早
		所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	小谷 民菜
		所属・職名	国際関係学研究科・准教授	氏名	佐藤 真千子
		所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	浜 由樹子
		所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	マティアス・ファイファー
		所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	堀内 賢志
		所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	森 直香
		所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	米山 優子
		所属・職名	国際関係学部・講師	氏名	浅間 哲平
		所属・職名	国際関係学部・講師	氏名	石川 義道
		所属・職名	国際関係学部・講師	氏名	宮崎 晋生
発表者	所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	栗田 和典	

講演題目
European Studies の研究ツール開発に関する研究 (4)
研究の目的、成果及び今後の展望
研究の目的、成果及び今後の展望
【目的】 本研究の目的は、国際関係学研究科附置の広域ヨーロッパ研究センター（以下、WERC）のさまざまな活動の成果を、研究科および学部の教育に資するものに展開することである。「広域ヨーロッパ」は、諸地域や国家が集塊化と流動化をくり返し、多様性と一体性を有する地域世界である。この対象の理解を深めるのには、国際関係論をはじめ、政治、経済、文化、言語、文学、歴史などもふくむさまざまな研究分野の成果の活用がもとめられる。
【成果】 2021年度は6年計画の第四年度であった。計画では、研究分担者が報告する研究会、および外部機関の研究者等を招聘する特別講義、ワークショップ、シンポジウムの開催、ウェブサイトの情報内容として企画案内と教育資料の充実、国内外の教育機関との情報交換、合同ゼミ学生発表会の再開などをあげた。オンライン会議システムの機能向上にともなって国外や国内の遠隔地から講師の招聘が可能になり、10件の特別講義・セミナーを開催できた。ワシントン（アメリカ合衆国）、ブレーメン（ドイツ）、シュトゥットガルト（同）、イスタンブル（トルコ）などの海外から、また、名古屋や東京などから講演がリアルタイムでおこなわれ、短い時間とはいえ、学生とのやりとりも展開された。Zoom等のツールは一定の人数以上のあつまりであっても密集と密閉と密接を避けられるので、2年ぶりに4ゼミの参加を得て合同ゼミ学生発表会を開催することも可能になった。また、前センター長の六鹿茂夫客員研究員を報告者とする2回のWERC研究会をこれもオンラインで開催し、とくに2回目は3月3日に「新たな局面を迎えた欧米とロシアの新冷戦」と題しておこなわれ、質疑応答をふくめて3時間にわたるものとなった。一方で、緒についたばかりのウクライナ大使館との協力関係はCOVID-19の感染拡大状況と大使館の人員の交替、および2月24日のロシアによるウクライナ侵攻のために展望を見いだせなくなかった。
【展望】 本研究の直接の成果につながる研究ツールの作成の準備は、今年度もまた卒業研究や修士論文にとりくむ学生の傾向の把握を継続した。合同ゼミ学生発表会で学生が取り組んだテーマも、こうした把握の蓄積につながった。研究ツールの提示のしかたとして、①基本的な事実や先行研究における共通の了解事項を説明すること、②その事実や事項にたいする複数の議論の要点を示すこと、③複数の視点から考察をうながす問いをみちびくこと、という構成がふさわしいように思われる。特別講義等の学生の質疑応答や発表から、論旨の単純化が見られたからである。単純化は明確化とは異なる。広域ヨーロッパのもつ多様性の側面を多様なままに論じる土台の提供を次年度の課題とする。